

# 秩父郡小鹿野町下塚居古墳副葬玉の検討

青 笹 基 史

## はじめに

秩父郡小鹿野町は埼玉県西部に位置する町であり(図1)、町内に所在する下塚居古墳の副葬矢鏃と石室の資料化は既に提示している(青笹2019, 2020)。引き続き下塚居古墳の基礎的な情報を提示することを目的として、本稿では副葬品のうち玉について資料化をおこなう。

下塚居古墳は墳丘規模が約14m以上の円墳で、埋葬施設に無袖羽子板形横穴式石室を採用している古墳である。石室内からは原位置を保っていないが副葬品が出土している。その内訳は、武器(弓矢)・装身具(玉・耳環)・工具(刀子)・土器(須恵器・土師器)である。

本稿では副葬品のうち玉について、その構成と年代的な位置付けについて検討する。具体的には、玉の素材と法量を明らかにし個々の種類の玉の年代的な位置付けをさぐる。さらに、異なる種類の玉が一連の環であるかを検証する。そのうえで、こうした手順で位置付けた玉の年代観とこれまでに位置付けてきた石室や矢鏃の年代観との整合性を確認する。

## 1. 下塚居古墳の概要

下塚居古墳は、秩父盆地において赤平川が蛇行する北岸の段丘上に位置する千尋原古墳群中の円墳である(図2)。1994年に発掘調査された古墳で、筆者は2017年から小鹿野町で基礎的な情報の提示を目的として遺物と図面類を対象とした調査を実施している。

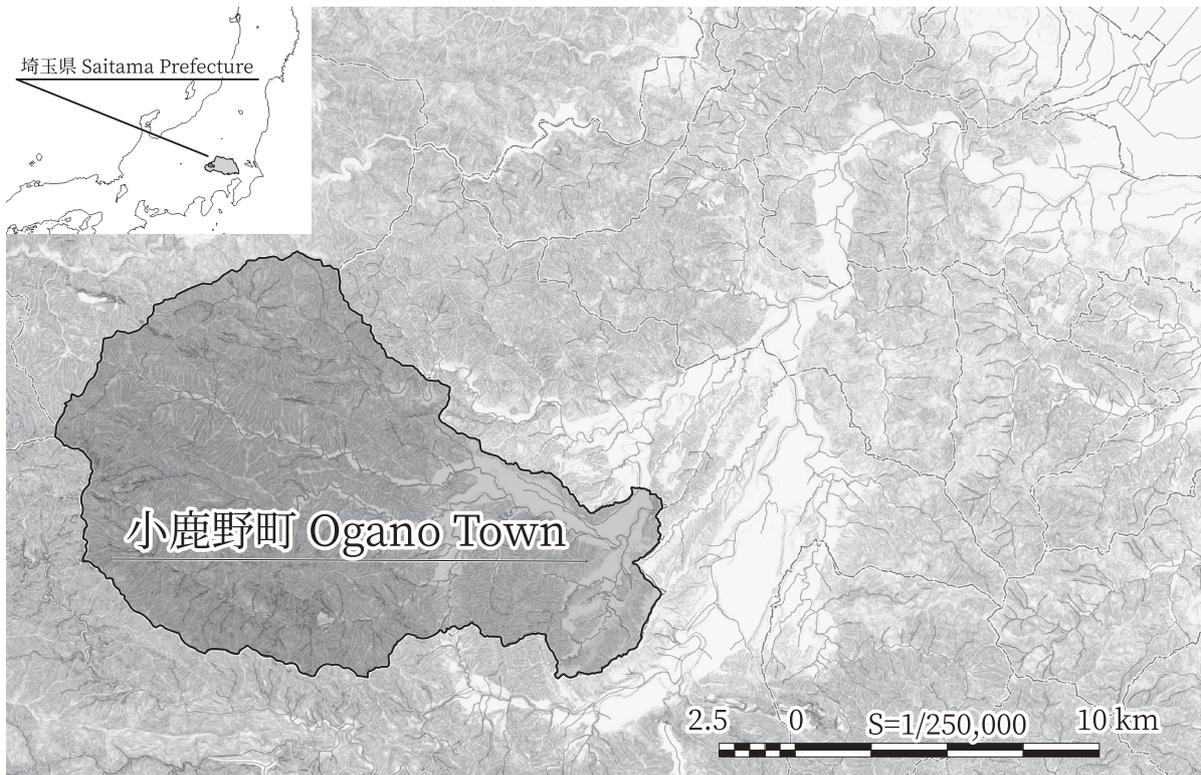


図1 小鹿野町の地理的環境



図2 小鹿野町における古墳の分布(上)と古墳の集中域における下塚居古墳の立地(下)

調査の結果、この古墳の埋葬施設は全長5.55mを測る無袖羽子板形横穴式石室であることが判明した。また、閉塞石が認められることから短いながらも羨道部の存在が指摘でき、墳丘内に馬蹄形控え積みをもつことが判明している。石室を立面で見ると、上に向かって斜めにせりあがっている状況がうかがえる。石材は羨道部と玄室で大きさが異なり、玄室は長辺積みによって構築されたと考えられる(青笹2020)。

調査の図面と写真から鑑みると当時の墳丘に対する認識と現段階の認識の間には差があるといえる。調査当時の秩父郡域における古墳の墳丘に関する認識は、明治大学による秩父市原谷1号・4号墳の発掘調査報告の成果によっていたものと考えられる。大塚初重は原谷1号・4号墳の調査報告に際し、秩父郡域の古墳が積石塚をさらに土で覆う特異な構造をもつ古墳として注目している(大塚1959)。下塚居古墳の調査当時に秩父郡域の数少ない古墳の発掘調査の事例を参照しなかったとは考えがたく、現段階で裏込構造として認識している控え積みを、調査時には積石塚として把握したものと推測する。

なお、調査図面のうち平面図からは外護列石の存在が確認でき、断面図からは外護列石より外側に石が表現されていることが確認できる。断面図に表現される石が葺石であれば、外護列石から約1.4m離れた地点に幅約85cmにわたる葺石が存在したことになる。また写真からも外護列石の外側の葺石が認められる(写真1・2)。



写真1 石室から東側墳丘を臨む



写真2 墳丘残存状況イメージ

これらの状況を整理して墳丘規模を復原した(図3)<sup>(1)</sup>。

外護列石の円弧から導き出される墳丘の復原径は約14mとなり、断面に表現される石を外護列石と同じ円弧で復原した場合には墳丘径は約16mとなる。なお、控え積みの長径は8.35mを測る<sup>(2)</sup>。下塚居古墳の墳丘規模は約14m以上であることは確実に、最大約16mの二段築成の円墳である可能性がある。ただし、外側の葺石については写真や断面図を通じてその存在を確認できるものの、平面図上にその範囲が示されておらず、外護列石の円弧で想定復原したものであり、注意が必要である。

石室内の遺物は上下2面に分けて取り上げられている。レベルの読み値からすると、矢鏃・銭貨・土器類・人骨が出土する面が上面、矢鏃・玉・耳環・刀子が出土する面が下面であると捉えられる。上面は遅くとも中世までに攪乱され、下面は中世以前の状況を示すものである。上面に矢鏃が移動していることを踏まえると、下面の状況は原位置とは考えがたい。しかし、各副葬品がまとまって出土していることから、後世の移動は小さいと想定できる。

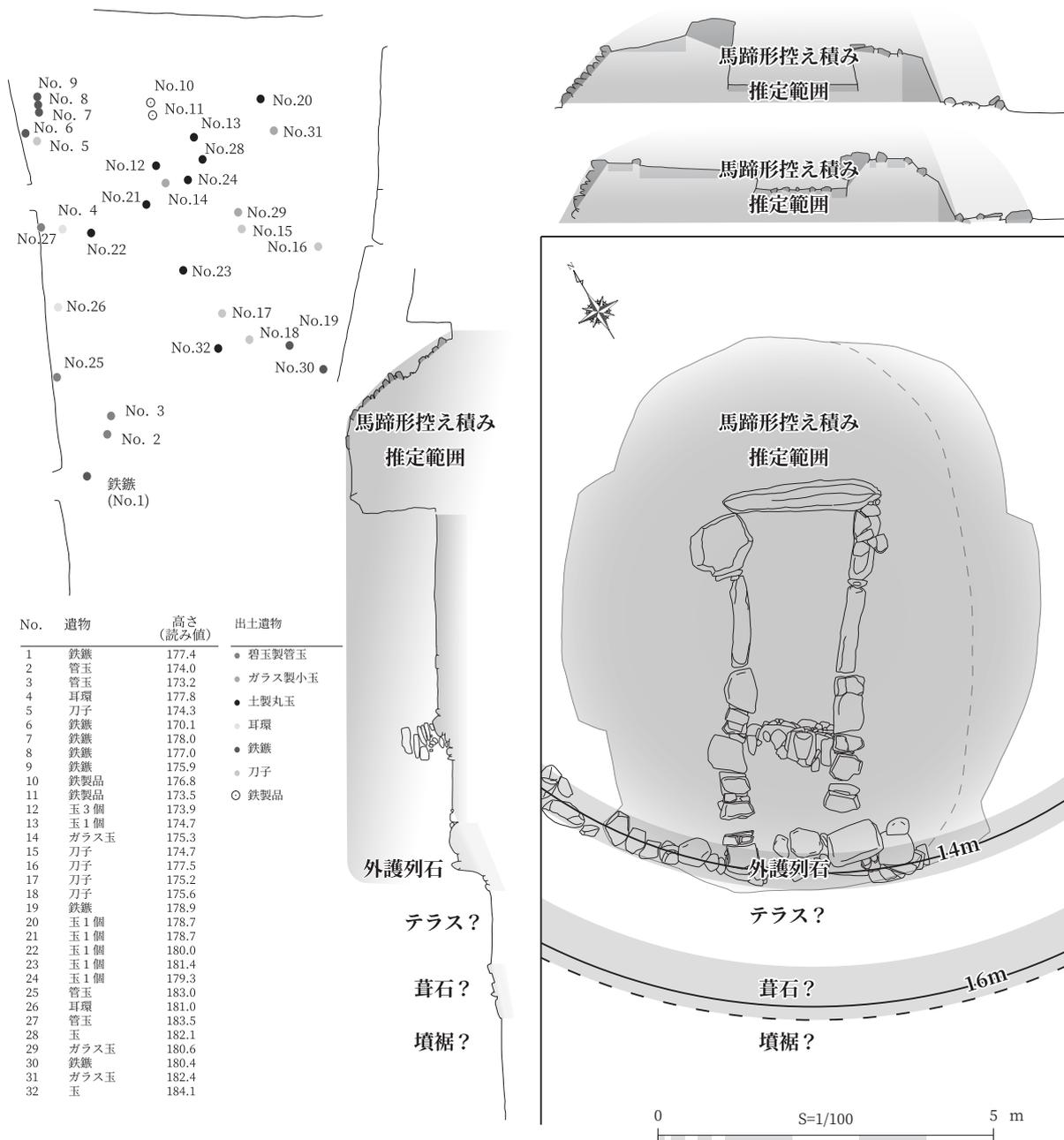


図3 下塚居古墳副葬品出土状況と墳丘復原図

## 2. 下塚居古墳出土遺物の概要

下塚居古墳出土遺物については前稿で整理しているが(青笹2019)、改めてその概要について述べる。ここでは調査図面に記載される遺物と、現況で所在が確認できた遺物についてまとめている(表1)。今回の調査で確認できた遺物は、鏃39点・弓金具3点・刀子6点・耳環2点・玉29点・銭貨15点である。図面に掲載される土師器1点・須恵器3点・陶器1点・人骨については前回に引き続きその所在を確認することができなかった。なお、2018年の調査時には観察・計数できなかった弓金具1点と刀子5点を前稿の計数に加えている<sup>(3)</sup>。

現況では下塚居古墳には武器・装身具・工具・土器が副葬されていたと考えられる。とくに、まとまった数の矢鏃が石室内から出土したことから、刀子の点数が多いことは特筆される。しかし、刀子については基礎的情報の提示ができていないうえに、刀子の多量副葬という現象の意義については類例を含め考究していく必要があるため、本稿では言及しない。

表1 下塚居古墳出土遺物台帳

台帳No.	素材	資料	掲載年	図No.	備考	台帳No.	素材	資料	掲載年	図No.	備考
1	鉄	鍬	2019	6 図 1	短頸式	51	碧玉	管玉	2021	4 図 1	
2	鉄	鍬	2019	6 図 2	短頸式	52	碧玉	管玉	2021	4 図 2	
3	鉄	鍬	2019	6 図 3	長頸式	53	碧玉	管玉	2021	4 図 3	
4	鉄	鍬	2019	6 図 4	長頸式	54	碧玉	管玉	2021	4 図 4	
5	鉄	鍬	2019	6 図 5	長頸式	55	ガラス	丸玉	2021	5 図 5	
6	鉄	鍬	2019	6 図 6	長頸式	56	ガラス	小玉	2021	5 図 6	
7	鉄	鍬	2019	6 図 7	長頸式	57	ガラス	小玉	2021	5 図 7	
8	鉄	鍬	2019	7 図 8	有頸平根式	58	ガラス	小玉	2021	5 図 8	
9	鉄	鍬	2019	7 図 9	長頸式	59	琥珀	棗玉	2021	6 図 9	
10	鉄	鍬	2019	7 図10	長頸式	60	土	丸玉	2021	6 図10	
11	鉄	鍬	2019	7 図11	長頸式	61	土	丸玉	2021	6 図11	
12	鉄	鍬	2019	7 図12	長頸式	62	土	丸玉	2021	6 図12	
13	鉄	鍬	2019	7 図13	長頸式	63	土	丸玉	2021	6 図13	
14	鉄	鍬	2019	7 図14	長頸式	64	土	丸玉	2021	6 図14	
15	鉄	鍬	2019	7 図15	有頸平根式	65	土	丸玉	2021	6 図15	
16	鉄	鍬	2019	7 図16	長頸式	66	土	丸玉	2021	6 図16	
17	鉄	鍬	2019	7 図17	長頸式	67	土	丸玉	2021	6 図17	
18	鉄	鍬	2019	8 図20	長頸式	68	土	丸玉	2021	6 図18	
19	鉄	鍬	2019	8 図21	長頸式	69	土	丸玉	2021	6 図19	
20	鉄	鍬	2019	8 図22	有頸平根式	70	土	丸玉	2021	6 図20	
21	鉄	鍬	2019	8 図23	長頸式	71	土	丸玉	2021	7 図21	
22	鉄	鍬	2019	8 図24	長頸式	72	土	丸玉	2021	7 図22	
23	鉄	鍬	2019	8 図25	長頸式	73	土	丸玉	2021	7 図23	
24	鉄	鍬	2019	8 図26	長頸式	74	土	丸玉	2021	7 図24	
25	鉄	鍬	2019	8 図27	長頸式	75	土	丸玉	2021	7 図25	
26	鉄	鍬	2019	8 図28	長頸式	76	土	丸玉	2021	7 図26	
27	鉄	鍬	2019	8 図29	長頸式	77	土	丸玉	2021	7 図27	
28	鉄	鍬	2019	8 図30	長頸式	78	土	丸玉	2021	7 図28	
29	鉄	鍬			無茎式	79	土	丸玉	2021	7 図29	
30	鉄	鍬		非掲載	長頸式	80	銅	銭貨			
31	鉄	鍬		非掲載	長頸式	81	銅	銭貨			
32	鉄	鍬		非掲載	長頸式	82	銅	銭貨			
33	鉄	鍬		非掲載	長頸式	83	銅	銭貨			
34	鉄	鍬		非掲載	長頸式	84	銅	銭貨			
35	鉄	鍬		非掲載	長頸式	85	銅	銭貨			
36	鉄	鍬		非掲載	長頸式	86	銅	銭貨			
37	鉄	鍬		非掲載	長頸式	87	銅	銭貨			
38	鉄	鍬		非掲載	長頸式	88	銅	銭貨			
39	鉄	鍬		非掲載	長頸式	89	銅	銭貨			
40	鉄	弓金具	2019	7 図18		90	銅	銭貨			
41	鉄	弓金具	2019	7 図19		91	銅	銭貨			
42	鉄	弓金具				92	銅	銭貨			
43	鉄	刀子				93	銅	銭貨			
44	鉄	刀子				94	銅	銭貨			
45	鉄	刀子				95	土	土師器			所在未確認
46	鉄	刀子				96	土	須恵器			所在未確認
47	鉄	刀子				97	土	須恵器			所在未確認
48	鉄	刀子				98	土	須恵器			所在未確認
49	鉄	耳環			鉄地金銅張か	99	土	陶器			所在未確認
50	鉄	耳環			鉄地金銅張か	100	-	人骨			所在未確認

### 3. 下塚居古墳の副葬玉について

下塚居古墳からは玉が29点出土した。今回の調査ですべての玉の計測と図化を実施した。玉はすべて同じ箱に収蔵されている。出土時に付けた番号が記されているラベルについては観察表にラベル記載番号を記入している(表2)。

玉は石室内下面からの出土のみで上面からは出土していない。これは玉が中世以前の攪乱によって動かされ、その後、中世までには石室内に土が堆積し、埋もれていた状況を示すと考えられる。副葬後から中世までの間に副葬品が持ち去られている可能性を考慮する必要があるものの、こうした状況からは矢鏃が上下両面ともに散在している状況とは異なり、玉は比較的攪乱による移動が少なかったことが想定される。図面に記載されるレベルの読み値からは下面の副葬品の床面からの位置が判然としない。①断面図にみられる奥壁石が石室床面から約1.3mの高さであること、②上面の遺物取り上げの読み値が91.9-123.0と30cmの差を内包すること、③上面最低と下面最高の地点で読み値に55cmの差があることを踏まえると、読み値のうえでは下面は上面最高地点より85cm下に位置すると考えられ、下面の高さは床面に近いことが想定される。また、玉の出土状況は平面では床面中央付近に集中する。

玉の内訳は碧玉製管玉4点・ガラス製丸玉4点・琥珀製棗玉1点・土製丸玉20点である。以下で資料の記述を進める(図4～7)。

1 碧玉製管玉 (濃緑色) 径10.0mm、全長30.0mm、孔径3.2mmを測る、円筒状の外観をしている。側面には長軸方向に細かな擦痕がみられる。穿孔は上下面の孔径を観察する限りでは穿孔上部が下部に比べて大きく開口しており、片面穿孔と捉えられる。上下両面ともに擦痕がみられ、穿孔後に剥離痕にミガキをかけている様子が看取される。孔内部の観察では糸の残存や糸ズレなどの痕跡は確認できなかった。孔径の差は穿孔具の回転軸のブレによるものと思われるが、穿孔下部の剥離は小さく、慎重に穿孔されたことがうかがえる。また剥離痕をミガキにより整形していることと併せて考えると、丁寧な作りであるといえる。

2 碧玉製管玉 (濃緑色) 径10.4mm、全長27.7mm、孔径3.0mmを測る、円筒状の外観をしている。側面には長軸方向に細かな擦痕がみられる。穿孔は上下面の孔径を観察する限りでは穿孔上部が下部に比べて大きく開口しており、片面穿孔と捉えられる。上下両面ともに擦痕がみられ、穿孔後に剥離痕にミガキをかけている様子が看取される。孔内部の観察では糸の残存や糸ズレなどの痕跡は確認できなかった。1と同様に丁寧な作りであるといえる。

3 碧玉製管玉 (濃緑色) 径10.2mm、全長25.0mm、孔径2.7mmを測る、円筒状の外観をしている。側面には長軸方向に細かな擦痕がみられる。穿孔は上下面の孔径を観察する限りでは穿孔上部が下部に比べて大きく開口しており、片面穿孔と捉えられる。上下両面ともに擦痕がみられ、穿孔後に剥離痕にミガキをかけている様子が看取される。孔内部の観察では糸の残存や糸ズレなどの痕跡は確認できなかった。1と同様に丁寧な作りであるといえる。

4 碧玉製管玉 (濃緑色) 径8.0mm、全長25.2mm、孔径2.5mmを測る、円筒状の外観をしている。側面には長軸方向に細かな擦痕がみられる。穿孔は上下面の孔径を観察する限りでは穿孔上部が下部に比べ開口しており、片面穿孔の可能性が高い。上下両面ともに擦痕がみられ、穿孔後に剥離痕にミガキをかけている様子が看取される。孔内部の観察では糸の残存や糸ズレなどの痕跡は確認できなかった。1と同様に丁寧な作りであるといえる。

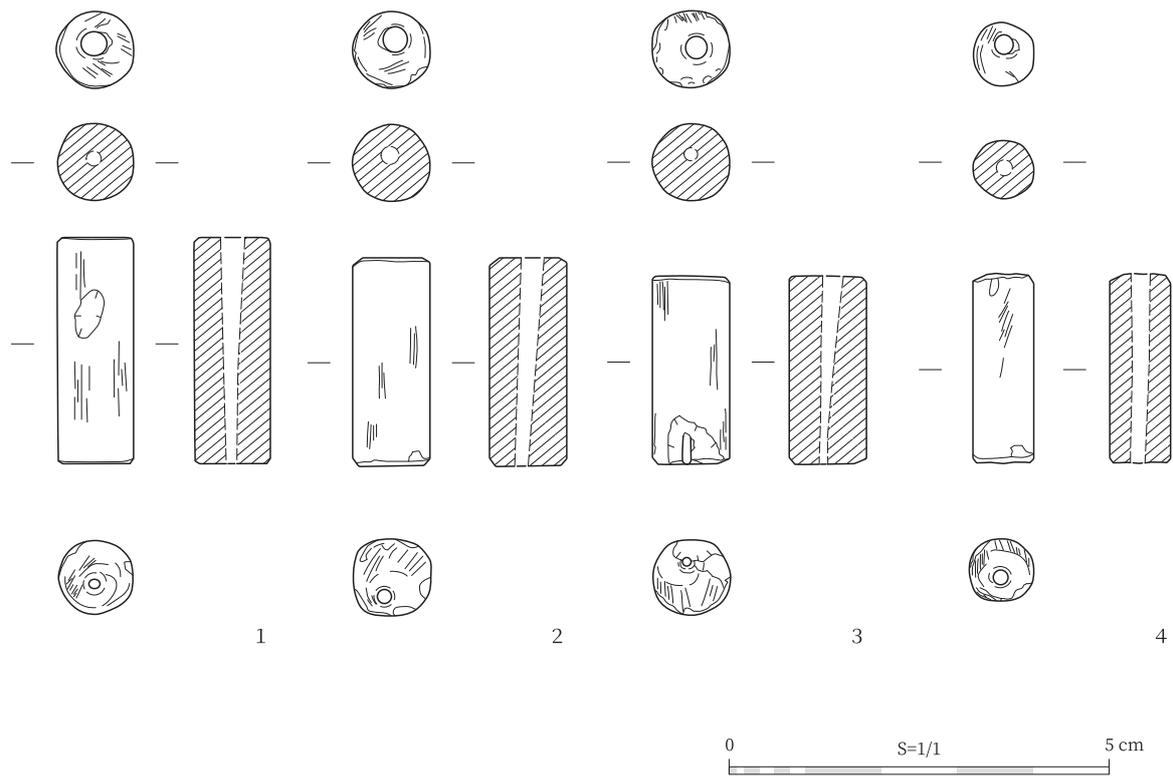


図4 下塚居古墳副葬玉類(1)碧玉製管玉

5 ガラス製丸玉 (濃青色) 径4.5mm、全長8.0mm、孔径2.0mmを測る、円球状の外観をしている。濁った色合いで内部に気泡列は確認できず、外表壁面に部分的な荒れがみられることから、鑄型との接触面が想定され、鑄型法により製作されたものと考えられる。下面は平坦に作出されるが、上面の面はやや斜めに作出されており、鑄型から取り出したあとの上面の整形はあまり丁寧におこなわれなかったことが想定される。

6 ガラス製小玉 (淡水色) 径3.0mm、全長2.5mm、孔径1.0mmを測る、円球状の外観をしている。濁った色合いで内部に気泡列は確認できず、外表壁面に部分的な荒れがみられることから、鑄型との接触面が想定され、鑄型法により製作されたものと考えられる。下面は平坦に作出されるが、上面の面はやや斜めに作出されている。5と同様、鑄型から取り出したあとの上面の整形は丁寧ではない。全体の法量は5に比べて小型である。

7 ガラス製小玉 (淡水色) 径3.0mm、全長2.5mm、孔径1.0mmを測る、円球状の外観をしている。濁った色合いで内部に気泡列は確認できず、外表壁面に部分的な荒れがみられることから、鑄型との接触面が想定され、鑄型法により製作されたものと考えられる。下面は平坦に作出されるが、上面の面はやや斜めに作出されている。6と同様、鑄型から取り出したあとの上面の整形は丁寧ではなく、法量も小さい。

8 ガラス製小玉 (淡水色) 径3.0mm、全長2.5mm、孔径1.0mmを測る、円球状の外観をしている。濁った色合いで内部に気泡列は確認できず、外表壁面に部分的な荒れがみられることから、鑄型との接触面が想定され、鑄型法により製作されたものと考えられる。下面は平坦に作出されるが、上面は丸みを帯びている。5～7とは異なり鑄型から取り出したあとの上面はほとんど整形をしていない。法量が小さいことは6・7と共通する。

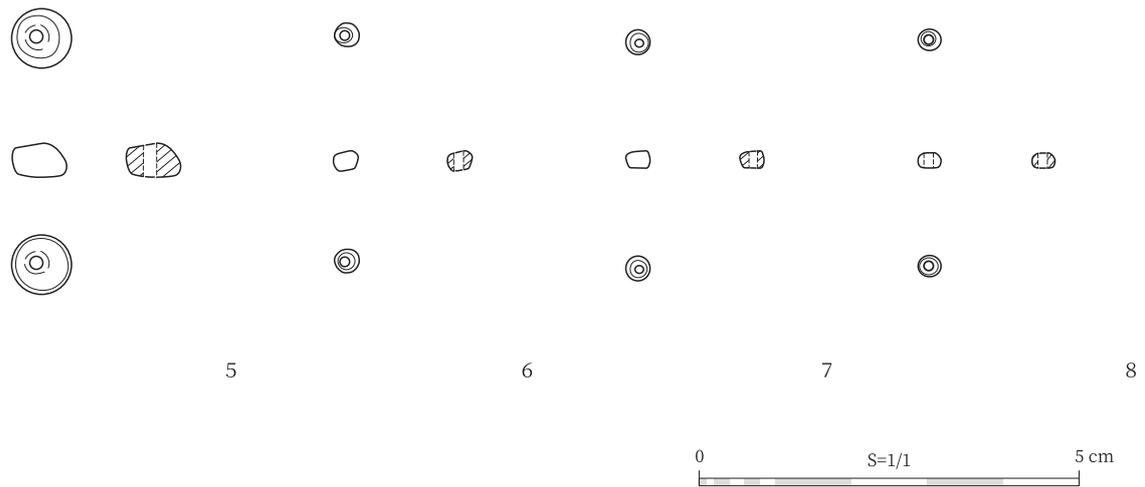


図5 下塚居古墳副葬玉類(2)ガラス製丸玉・小玉

9 琥珀製棗玉 (茶褐色) 径8.0mm、全長7.5mm、孔径2.5mmを測る、現状では円錐状で、大半を欠損している。原状は円筒状で上下の先端が先細りする形状であったことが想定される。色調は全体に明るく、とくに表面は明茶褐色である。遺存状態が悪いため断言はできないが、遺存箇所の表面に稜は認めがたい。

10 土製丸玉 (暗茶褐色) 径7.0mm、全長6.5mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好である。穿孔方向は明確ではないものの、上下両面の孔径に差がみられないことから両面穿孔の可能性が高い。孔内部の観察から成形・穿孔ののちに焼成したと考えられる。

11 土製丸玉 (暗茶褐色) 径6.5mm、全長5.0mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

12 土製丸玉 (暗茶褐色) 径8.0mm、全長6.0mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

13 土製丸玉 (暗茶褐色) 径7.5mm、全長4.5mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

14 土製丸玉 (暗茶褐色) 径8.0mm、全長6.5mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

15 土製丸玉 (黄白色) 径10.5mm、全長9.0mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成はやや良好で、穿孔方向は明確ではない。明るい色調で素焼きと考えられる。

16 土製丸玉 (橙褐色) 径11.0mm、全長10.0mm、孔径2.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成はやや良好で、穿孔方向は明確ではない。15と同様の特徴であると考えられる。

17 土製丸玉 (暗茶褐色) 径6.5mm、全長4.5mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

18 土製丸玉 (暗茶褐色) 径7.5mm、全長6.0mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

19 土製丸玉 (暗茶褐色) 径7.0mm、全長4.5mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

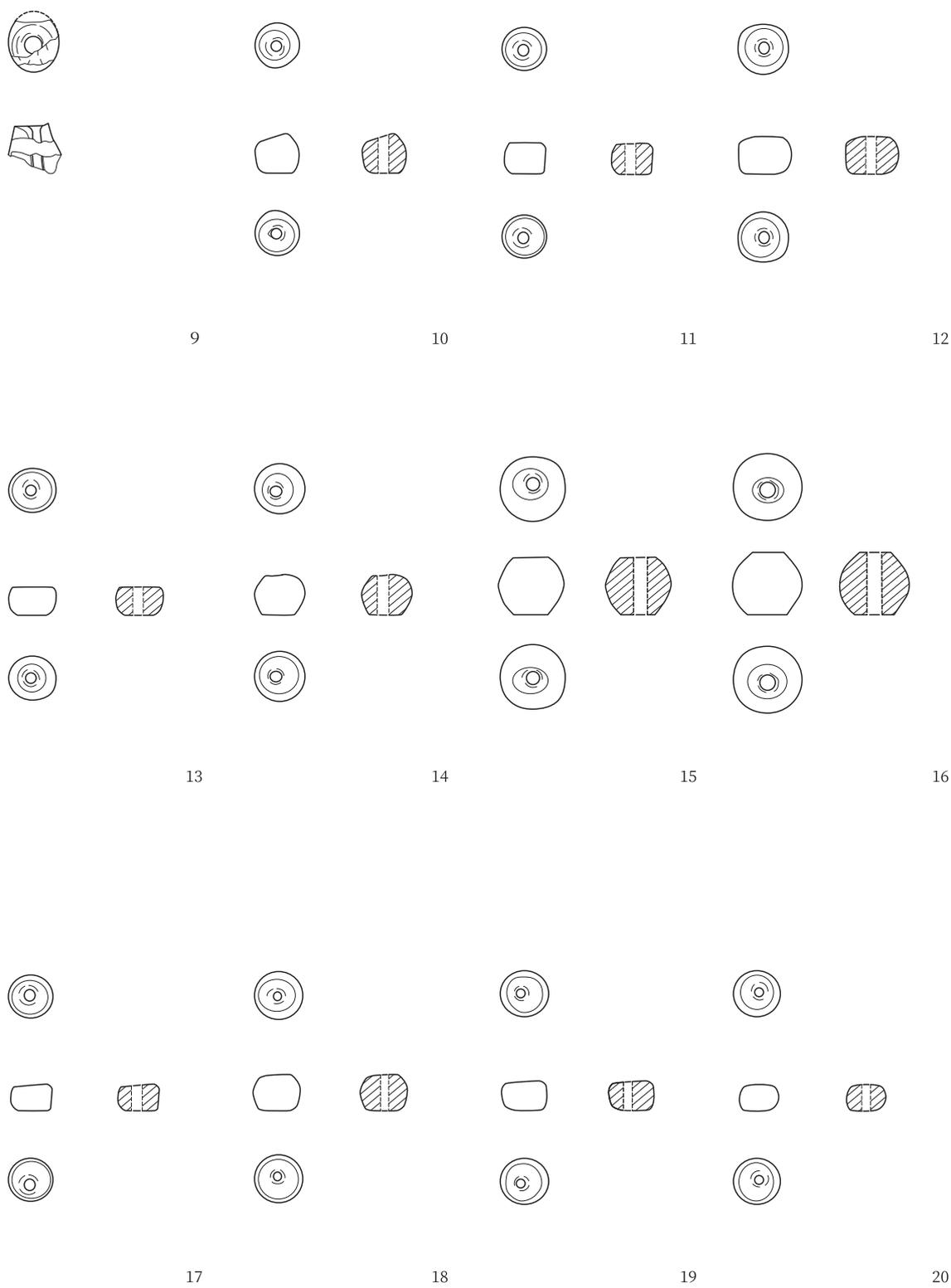


图6 下塚居古墳副葬玉類(3)琥珀製棗玉・土製丸玉

- 20 土製丸玉（暗茶褐色） 径6.0mm、全長4.0mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 21 土製丸玉（暗茶褐色） 径6.5mm、全長4.5mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 22 土製丸玉（暗茶褐色） 径5.0mm、全長4.0mm、孔径1.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 23 土製丸玉（暗茶褐色） 径8.0mm、全長6.0mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 24 土製丸玉（暗茶褐色） 径8.0mm、全長5.0mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 25 土製丸玉（暗茶褐色） 径7.0mm、全長4.0mm、孔径1.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 26 土製丸玉（暗茶褐色） 径8.0mm、全長6.0mm、孔径2.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 27 土製丸玉（暗茶褐色） 径8.0mm、全長6.5mm、孔径1.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 28 土製丸玉（暗茶褐色） 径6.5mm、全長4.0mm、孔径1.5mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。
- 29 土製丸玉（暗茶褐色） 径7.0mm、全長5.0mm、孔径1.0mmを測る、円球形の外観をしている。焼成は良好で、穿孔方向は明確ではない。10と同様の特徴であると考えられる。

#### 4. まとめ

下塚居古墳副葬玉の構成は、碧玉製管玉・ガラス製丸玉・小玉・琥珀製棗玉・土製丸玉の5種からなる。これらの玉は埼玉県立さきたま史跡の博物館において平成29年度企画展「埼玉の古墳2」で展示され、管玉は石材の色調と片面穿孔の特徴から、鳥根県松江市花仙山産の碧玉を用いて出雲で製作されたと指摘されている（埼玉県立さきたま史跡の博物館2017：p.26）。

ここでは下塚居古墳副葬玉について一連の資料として捉えうるのか、という点を踏まえてまとめていきたい。玉は装身具として機能するためには一連の環で一つの器物となるものであり、出土状況・色調・法量から一連の共通性を抽出することが可能か検証する。

**出土状況** 碧玉製管玉は西側側壁、ガラス製小玉と土製丸玉は床面中央から出土している。琥珀製棗玉は出土時には土製と認識されていた。また、ラベル記載番号と石室内遺物取り上げ状況図の番号が照合しない資料については出土位置は不明である。碧玉製管玉が一連とみるには出土位置が離れているが、ガラス製丸玉・小玉と土製丸玉は一連の可能性がある。

**碧玉製管玉** すべて濃緑色で硬質な石材である。径は10mmと太形で、1点のみ8mmである。全長が25-30mmで、穿孔方法は片面穿孔による。色調から花仙山産碧玉と推定される。穿孔は片面で鉄針によるものと考えられ、これらの特徴から山陰系の玉と判断できる。下塚居古墳例はすべてこれらの特徴を備えることから、高い共通性がみとれる。

山陰系碧玉製管玉は古墳時代前期から生産されていたが中期後半の断絶をはさみ、後期前半

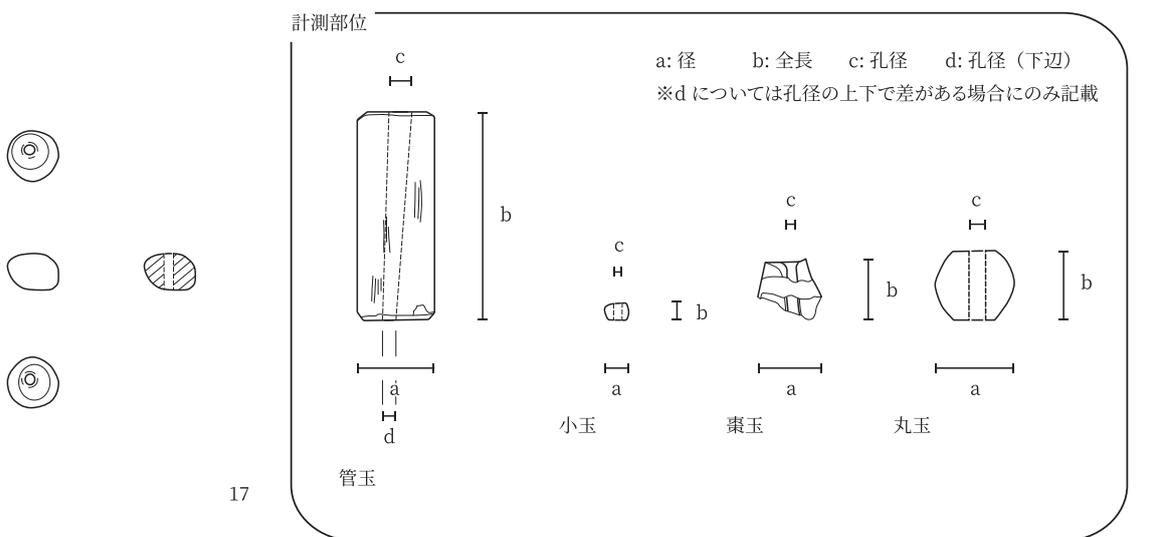
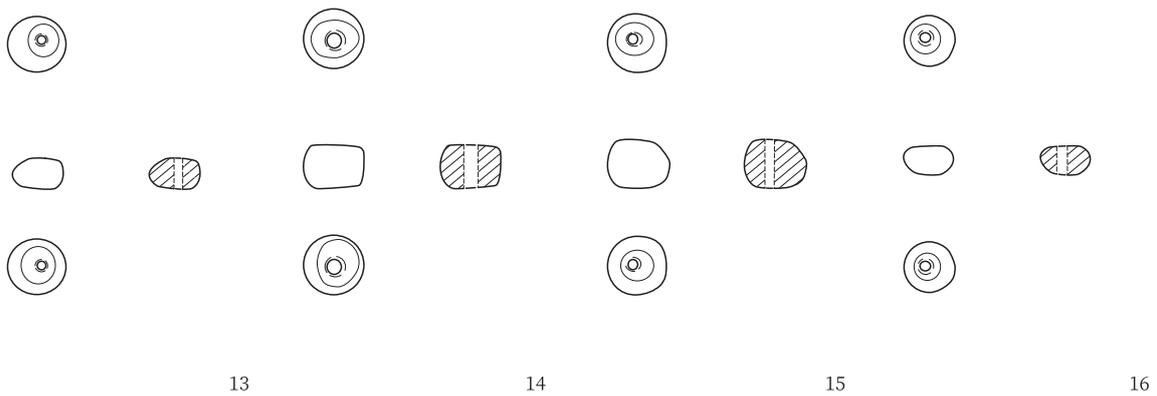
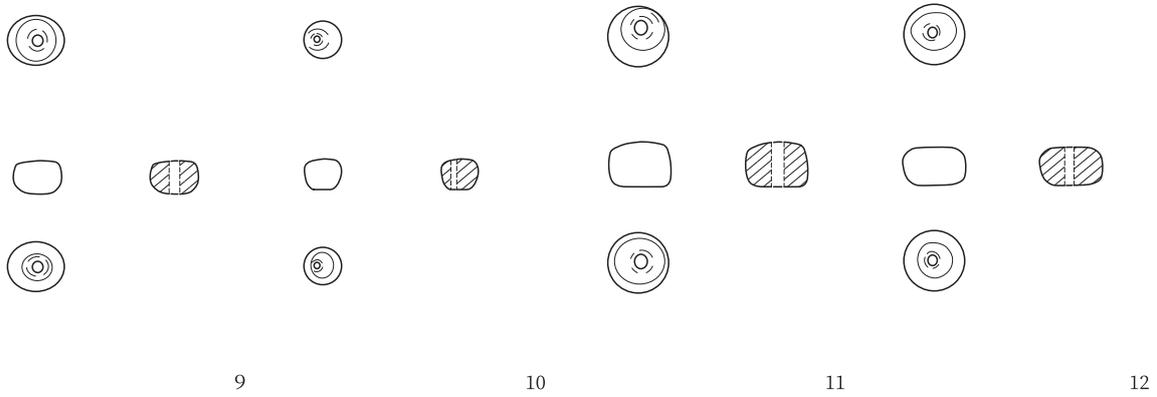


図7 下塚居古墳副葬玉類(4)土製丸玉

表2 下塚居古墳副葬玉類観察表

台帳No.	掲載No.	系統	素材	産地	資料	ラベルNo.	色	製作方法	孔内	表面	径	全長	孔径	孔径(下辺)	備考
51	4 図1	山陰系	碧玉	花仙山	管玉	25②	濃緑色	片面穿孔	なし	擦痕	10.0	30.0	3.2	1.5	
52	4 図2	山陰系	碧玉	花仙山	管玉	2②	濃緑色	片面穿孔	なし	擦痕	10.4	27.7	3.0	1.7	
53	4 図3	山陰系	碧玉	花仙山	管玉	3②	濃緑色	片面穿孔	不明	擦痕	10.2	25.0	2.7	1.2	
54	4 図4	山陰系	碧玉	花仙山	管玉	27②	濃緑色	片面穿孔	なし	擦痕	8.0	25.2	2.5	1.7	
55	5 図5	不明	ガラス	不明	丸玉	14②	濃青色	鑄型	なし		4.5	8.0	2.0		
56	5 図6	不明	ガラス	不明	小玉	29②	淡水色	鑄型	なし		3.0	2.5	1.0		
57	5 図7	不明	ガラス	不明	小玉	31②	淡水色	鑄型	なし		3.0	2.5	1.0		
58	5 図8	不明	ガラス	不明	小玉	36②	淡水色	鑄型	なし		3.0	2.5	1.0		
59	6 図9	近畿?	琥珀	不明	環玉	22②	黄白色	不明	不明		8.0	7.5	2.5		
60	6 図10	不明	土	不明	丸玉	13②1	茶褐色	不明	なし		7.0	6.5	2.0		
61	6 図11	不明	土	不明	丸玉	13②2-1	暗茶褐色	不明	なし		6.5	5.0	2.0		
62	6 図12	不明	土	不明	丸玉	13②2-2	暗茶褐色	不明	なし		8.0	6.0	2.0		
63	6 図13	不明	土	不明	丸玉	13②2-3	暗茶褐色	不明	なし		7.5	4.5	2.0		
64	6 図14	不明	土	不明	丸玉	20②	暗茶褐色	不明	なし		8.0	6.5	2.0		
65	6 図15	不明	土	不明	丸玉	21②	黄白色	不明	なし		10.5	9.0	2.0		素焼き
66	6 図16	不明	土	不明	丸玉	23②	橙褐色	不明	なし		11.0	10.0	2.5		素焼き
67	6 図17	不明	土	不明	丸玉	24②	暗茶褐色	不明	なし		6.5	4.5	2.0		
68	6 図18	不明	土	不明	丸玉	28②	暗茶褐色	不明	なし		7.5	6.0	1.5		
69	6 図19	不明	土	不明	丸玉	32②	暗茶褐色	不明	なし		7.0	4.5	1.5		
70	6 図20	不明	土	不明	丸玉	33②1	暗茶褐色	不明	なし		6.0	4.0	1.5		
71	7 図21	不明	土	不明	丸玉	33②2	暗茶褐色	不明	なし		6.5	4.5	1.5		
72	7 図22	不明	土	不明	丸玉	34②1	暗茶褐色	不明	なし		5.0	4.0	1.0		
73	7 図23	不明	土	不明	丸玉	34②2-1	暗茶褐色	不明	なし		8.0	6.0	2.0		
74	7 図24	不明	土	不明	丸玉	34②2-2	暗茶褐色	不明	なし		8.0	5.0	1.5		
75	7 図25	不明	土	不明	丸玉	34②2-3	暗茶褐色	不明	なし		7.0	4.0	1.0		
76	7 図26	不明	土	不明	丸玉	34②2-4	暗茶褐色	不明	なし		8.0	6.0	2.0		
77	7 図27	不明	土	不明	丸玉	34②2-5	暗茶褐色	不明	なし		8.0	6.5	1.0		
78	7 図28	不明	土	不明	丸玉	35②1	暗茶褐色	不明	なし		6.5	4.0	1.5		
79	7 図29	不明	土	不明	丸玉	35②2	暗茶褐色	不明	なし		7.0	5.0	1.0		

に再び生産される。後期には全長と径の比率が3：1となる強い規格性と片面穿孔という穿孔方法の共通性が顕著となる(大賀2009, 米田2009)。

年代的な位置づけは法量から捉えることができる。本例は大賀克彦の材質別法量分布による領域 JFa に位置付けられ、この領域は遅くとも後期中葉には生産が停止する(大賀2013)。

下塚居古墳出土の碧玉製管玉は長さ25-30mmであり、後期前半から中葉の生産と位置付けることができる。

**ガラス製丸玉・小玉** 素材については肉眼では特定できなかったが、すべて鋳型法で製作され、径は4.5mmの1点を除いて3mmで、全長は2mmの1点を除いて1mmである。濃青色の1点が大きく、淡水色の3点の法量は同じであり、高い共通性がみとれる。

年代的な位置づけは蛍光X線分析による成分分析の必要があるため、本稿では位置付けられなかった。

**琥珀製棗玉** 欠損により遺存状態が悪いが、径は8mmである。琥珀製棗玉は、後期に日本列島で広域に分布し、とくに後期半ばには東海以東で多くみられる(戸根2016)。琥珀製棗玉は水晶製切子玉と同様、後期半ばから後半にかけて大型化していく傾向が指摘されているが(斉藤2008)、本例では全長が不明であるため、年代的には位置付けられない。

**土製丸玉** 径10.5cm・11cmと、径6～8cmの2群にわけて捉えられる。大形の1群は明るい色調であり素焼きと考えられ、小形の1群は1点を除いていずれもやや光沢のある暗い色調で、漆等を付着しているものと考えられる。しかし、小形の1群の表面付着物は肉眼では特定できなかった。小形の1群は法量・色調に高い共通性がみとれる。

土製丸玉は、中期の滑石製白玉と替わるように後期から流通する(大賀2002)。丸玉・白玉の組成を中心とした地域性に関する論及がみられ(戸根2016)、地域性の高い器物の可能性がある。一方で、地域性の差は法量から時期的な消長を探ることを困難にしている。土製丸玉の年代的な位置づけは各地域における悉皆的な集成と定量的な法量分析ののちに検討が可能となるだろう。ここでは、後期以降に位置付けられることを確認するにとどめたい。

以上を踏まえると、下塚居古墳副葬玉は各種類ともに法量・色調に高い共通性がみられ、出土位置に近いガラス製丸玉・小玉と土製丸玉は一連であった可能性があることが指摘できる。また年代的には古墳時代後期前半から中葉に位置付けられる。

## おわりに

下塚居古墳は墳丘規模が約14m以上の円墳で、埋葬施設に無袖羽子板形横穴式石室を採用している古墳である。その副葬品のうち玉については、碧玉製管玉・ガラス製丸玉・小玉・琥珀製棗玉・土製丸玉の5種からなり、古墳時代後期前半から中葉までに生産されていたと考えられるセットである。これまでに位置付けてきた石室(TK43型式期以降)や矢鏃(TK209型式期以降)に比べると、玉の年代観は古相を示す。その背景については伝世などの問題を含めて慎重な検証が必要となるが、下塚居古墳副葬品総体のなかで位置付けるべき課題であるため、本稿では玉類の基礎的な情報を提示するにとどめたい。

執筆にあたって、資料調査等で下記の個人・機関にお世話になった。末筆ながら感謝申し上げます。

(敬称略)

小鹿野町教育委員会・肥沼隆弘・山本正実

## 註

- (1)前稿においてNo.3として提示した図面は $S = 1/200$ で提示しており、原図には $S = 1/40$ の表記が確認できた(青笹2020:p.79)。そのため、前稿においてはNo.3の図の性格について判断できなかった。本稿執筆に際し、墳丘復原図を作成する過程で測点と各図面間の整合性を確認していたところ原図の縮尺を $S = 1/80$ とした場合に、他の図面との整合性がとれることが判明した。これに基づき、図3においてNo.3に存在する石の位置と各測点からNo.11の石室図面と位置を合わせている。断面との整合性を確認するため、No.5,7の石室長辺側の断面図とNo.6の短辺側の断面図を併せて提示した。No.5,7の断面図を結合した場合に導き出される控え積みの長径は8.35mであり、No.3を50%に縮小した場合の外形の長径も8.345mとほぼ同大となる。よってここではNo.3,5,6,7,11の図面を統合し、墳丘を復原している。
- (2)埼玉県立さきたま史跡の博物館の平成29年度企画展において下塚居古墳の墳丘規模は6.5mと示されているが(埼玉県立さきたま史跡の博物館2017:p.26)、これは控え積みの長径か石室の全長を反映していると考えられる。
- (3)前稿で計数を実施した2018年8月23日に保存処理中であった資料を含めた出土品の保存処理が終了したことから、2020年12月22日に再度計測と未図化遺物の実測をおこなった。当日、保存処理後の金属製品に下塚居古墳出土品が含まれることを小鹿野町教育委員会にご教示いただき、前稿より弓金具と刀子の点数を改めた。

## 図表出典

- 図1 青笹2019で作成した地図をもとに、Adobe Illustrator CC 2021でレイアウトした。下図となる地図は国土地理院が提供する国土基盤地図情報をQGISで作成(4.3 'Madeira')。
- 図2 青笹2020で作成した地図をもとに、Adobe Illustrator CC 2021でレイアウトした。下図となる地図は図1と同様に作成したが、QGISの動作環境が異なる(3.10.0-A 'Coruna')。
- 図3 青笹2020をもとに作成。
- 図4～7 筆者実測。
- 写真1 小鹿野町教育委員会提供。
- 写真2 写真1に筆者加筆。

## 引用文献

- 青笹基史 2019 「秩父郡小鹿野町下塚居古墳副葬矢鏃の検討」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第12号  
埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.43-62
- 青笹基史 2020 「秩父郡小鹿野町下塚居古墳遺構の検討」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第13号  
埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.77-95
- 大賀克彦 2002 「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 小学館 東京 pp.313-320
- 大賀克彦 2009 「山陰系玉の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究』  
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査事業団 松江 pp.9-62
- 大賀克彦 2013 「①玉」『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社 東京 pp.147-159
- 大塚初重 1959 「埼玉県秩父市原谷第一・第四号墳」『日本考古学年報八(昭和30年度)』  
日本考古学協会 東京
- 斉藤あや 2008 「古墳時代後期における琥珀製棗玉の再検討—地域的偏在と大型化—」『史叢』78  
日本大学史学会 東京 pp.199-218
- 埼玉県立さきたま史跡の博物館 2017 『埼玉の古墳2 秩父・児玉・大里』行田
- 戸根比呂子 2016 「中原4号墳出土の玉」『伝法 中原古墳群』富士市埋蔵文化財調査報告第59集  
富士市教育委員会 富士 pp.183-192
- 米田克彦 2009 「穿孔技術からみた出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究』  
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査事業団 松江 pp.93-126